論　語

初　級　講　座　テ　キ　ス　ト

作成　宮本莞爾
令和７年５月

目次

巧言令色 ……（一の一）学而第一 03 一頁

【参考】公冶長第五 25 一頁

弟子、いりては則ち孝 ……（一の二）学而第一 06 二頁

吾十有五 ……（一の三）為政第二 04 三頁

【参考】年齢の呼び名 四頁

故きを温めて ……（一の四）為政第二 11 五頁

義を見て為さざるは ……（一の五）為政第二 24 六頁

朝に道を聞かば ……（一の六）里仁第四 08 七頁

之を知る者は ……（一の七）雍也第六 20 八頁

憤せずんば啓せず ……（一の八）述而第七 08 九頁

三人行えば ……（一の九）述而第七 22 十頁

剛毅朴訥 ……（一の十）子路第十三 27 十一頁

学びて時に之を習う ……（二の一）学而第一 01 十二頁

【参考】憲問第十四 37 十三頁

父母は唯だ ……（二の二）為政第二 06 十四頁

学びて思わざれば ……（二の三）為政第二 15 十五頁

由、女に之を知るを誨えんか ……（二の四）為政第二 17 十六頁

唯だ仁者のみ ……（二の五）里仁第四 03 十七頁

君子は終食の間も ……（二の六）里仁第四 05 一部 十八頁

（二の六）里仁第四 05 全文 十九頁

父母在せば ……（二の七）里仁第四 19 二十頁

商之を聞く ……（二の八）顔淵第十二 05 一部 二十一頁

（二の八）顔淵第十二 05 全文 二十二頁

樊遅　仁を問う ……（二の九）顔淵第十二 22 一部 二十三頁

（二の九）顔淵第十二 22 全文 二十四頁

【参考】為政第二 19 二十五頁

性は相近きなり ……（二の十）陽貨第十七 02 二十六頁

（一の一）学而第一 03

【書き下し文】

子の曰わく、「巧言令色、鮮矣仁。」

【現代訳文】

先生がおっしゃった。「言葉たくみで、見てくればかり飾っている者に、仁のある者は少ない。」

【白文（原文）】

子曰　「巧言令色、鮮矣仁。」

【訓読文】

子　曰、　「巧　言　令　色、鮮　矣　仁。」

【参考】公冶長第五 25

【書き下し文】

子の曰わく、「巧言令色、足恭なるは、左丘明これを恥ず、丘も亦たこれを恥ず。怨みを匿して其の人を友とするは、左丘明これを恥ず、丘も亦たこれを恥ず。」

「足恭」・・度が過ぎてうやうやしいこと。また、おもねること。

【現代訳文】

先生がおっしゃった。「口先が達者で見てくれがよく、うやうやしさが過ぎるのは、古の賢人左丘明は恥とした。私もこれを恥とする。恨みを隠してその人を友とするのは、左丘明は恥とした。私もこれを恥とする。」

【訓読文】

子　曰、　「巧　言　令　色　足　恭、左　丘　明　恥レ之、
丘　亦　恥レ之。匿レ怨而　友二其人一、　左　丘　明　恥レ之、
丘　亦　恥レ之。」

【書き下し文】

子の曰わく、「弟子、入りては則ち孝、出でては則ち弟、謹みて信あり、汎く衆を愛して仁に親しみ。行いて余力あれば、則ち以って文を学ぶ。」

【現代訳文】

先生がおっしゃった。「若者よ、家庭では親孝行を心がけ、家の外では兄や年長者を敬いなさい。謹みのある態度で、何より誠実を心がける。広く多くの人を愛して仁に親しむ。こうしたことを行なってなお余力があれば、その時はじめて書物を学ぶべきだ。」

【白文（原文）】

子曰「弟子入則孝、出則弟、謹而信、汎愛衆而親仁。行有余力、則以学文。」

【訓読文】

子曰、「弟子入則孝、出則弟、謹而信、汎愛衆而親仁、行有余力、則以学文。」

【書き下し文】

子の曰わく、「吾十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順ふ。七十にして心の欲する所に従へども、矩を踰えず。」

【現代訳文】

先生がおっしゃった。「私は十五歳の時、学問を志した。三十歳の時、何者にも動じない立場を持てるようになった。四十歳、迷いも無くやるべきことをやったよ。五十歳でようやく天命を知るに至った。六十歳ともなると、人の話を素直にきける余裕も出てくる。七十歳、もはや心の思うままにふるまって、しかも道義から外れることが無い。こういう境地に至ったのだ。」

【白文（原文）】

子曰　「吾十有五而志于学。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。六十而耳順。七十而従心所欲、不踰矩。」

【訓読文】

子曰、「吾十有五而志于学。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。六十而耳順。七十而従心所欲、不踰矩。」

【参考】年齢の呼び名

十五歳　志学　論語
三十歳　而立　論語
四十歳　不惑　論語
五十歳　知命　論語
六十歳　耳順　論語
六十一歳　還暦
七十歳　従心　論語
七十歳　古稀　杜甫の『曲江』から

朝回日日典春衣　朝(ちょう)より回(かえ)って日日(にちにち)春衣を典(てん)す
毎日江頭尽酔帰　毎日江頭(こうとう)に酔(ゑ)いを尽くして帰る
酒債尋常行処有　酒債(しゅさい)尋常行処(こうしょ)に有り
人生七十古来稀　人生七十古来稀なり
穿花蛺蝶深深見　花を穿(うが)つ蛺蝶(きょうちょう)は深深として見え
点水蜻蜓款款飛　水に点ずる蜻蜓(せいてい)は款款(かんかん)として飛ぶ
伝語風光共流転　伝語(でんご)す風光共に流転して
暫時相賞莫相違　暫時相賞(あひしょう)して相違(あひたが)うこと莫(な)からんと

七十七歳　喜寿
八十歳　傘寿
八十八歳　米寿
九十歳　卒寿
九十九歳　白寿
百歳　百寿（紀寿）
百八歳　茶寿

（一の四）為政第二 11

【書き下し文】

子の曰わく、「故きを温めて新しきを知る、以て師と為るべし。」

㊟「温」を「尋ねる」とする解釈もある（集解・集注）。

【現代訳文】

先生がおっしゃった。「伝統的な物事に習熟し、しかも新しい事物にも通じている。こういう人物なら、人の師となれるに違いない。」

【白文（原文）】

子曰　「温故而知新、可以為師矣。」

【訓読文】

子曰、「温故而知新、可以為師矣。」

（一の五）為政第二24

【書き下し文】

子の曰わく、「其の鬼に非ずしてこれを祭るは、諂いなり。義を見て為さるは勇なきなり。」

【現代訳文】

先生がおっしゃった。「相手がご先祖さまの霊でもないのに、むやみにペコペコするのは、ただのへつらいだ。目の前にやるべき正しい道が見えているのに、それをやらないというのは、ただの臆病だ。」

【白文（原文）】

子曰「非其鬼而祭之、諂也。見義不為、無勇也。」

【訓読文】

子曰、「非ニ其ノ鬼ニ而祭ルハ之ヲ、諂也。見テ義ヲ不ルハ為、無キ勇也。」

（一の六）里仁第四 08

【書き下し文】

子の曰わく、「朝に道を聞きては夕べに死すとも可なり。」

「道」・・人によってさまざま。人の世の真実、人間として大切なもの、生きてあることの意味、或いは死への覚悟、自分の心に響くものが道である。
「聞」・・学ぶ。
「可」・・それで充分。

【現代訳文】

先生がおっしゃった。「ある朝、物事の道理が掴めたとしたら、その日の夕方にはもう死んでしまっても本望だよ。」

【白文（原文）】

子曰　「朝聞道、夕死可矣。」

【訓読文】

子　曰（ハク）、「朝（ニ）聞（キテハ）道（ヲ）、夕（ベニ）死（ストモ）可（ナリ）矣（ト）。」

（一の七）雍也第六 20

【書き下し文】

子の曰わく、「これを知る者はこれを好む者に如かず、これを好む者はこれを楽しむ者に如かず。」

【現代訳文】

先生がおっしゃった。「(道を志すことで)ただ知っているというだけの人は、それを好きな人には及ばない。それを好きな人も、それを楽しむ人には及ばない。」

【白文（原文）】

子曰　「知之者不如好之者、好之者不如楽之者。」

【訓読文】

子曰、「知之者不如好之者、好之者不如楽之者。」

【書き下し文】

子の曰わく、「憤せずんば啓せず。非(悱)せずんば発せず。一隅を挙げてこれに示し、三隅を以て返えらざれば、則ち復たせざるなり。」

【現代訳文】

先生がおっしゃった。「わかりたくてわかりたくて、悶え苦しんでいるようでなければ、こちらから指導はしない。理解したことを言葉にしたくて、でもできなくて、もがき苦しんでいるようでなければ、こちらからは教えない。一つ教えると三倍の質問や疑問が返ってくるようでなければ、再びは教えない。」

【白文（原文）】

子曰　「不憤不啓、不非(悱)不発、挙一偶不以三隅反、則不復也。」

【訓読文】

子曰、「不憤不啓。不非（悱）不発。挙一偶不以三隅反、則不復也。」

（一の九）述而第七 22

【書き下し文】

子の曰わく、「我れ三人行なえば必ず我が師有り。其の善き者を択びてこれに従ひ、其の善からざる者にしてこれを改む。

【現代訳文】

先生がおっしゃった。「三人がかりで行動すれば、私は自分以外の二人のうちに必ず師を見出すよ。いいほうを手本にして、悪いほうの汚点を改めればいいんだ」

【白文（原文）】

子曰　「三人行、必有我師焉。擇其善者而從之、其不善者而改之。」

【訓読文】

子曰、「三人行、必有我師焉。擇其善者而從之、其不善者而改之。」

（一の十）子路第十三27

【書き下し文】

子の曰わく、「剛毅木訥、仁に近し。」

【現代訳文】

先生がおっしゃった。「まっすぐで勇敢で質実、そして口数は少ない。そういう人は、仁に近いといえるだろうね」

【白文（原文）】

子曰「剛毅、木訥、近仁。」

【訓読文】

子曰、「剛毅、木訥、近仁。」

（二の一）学而第一 01

【書き下し文】

子の曰わく、「学びて時にこれを習う、亦た説ばしからずや。　朋あり、遠方より来たる、亦た楽しからずや。人知らずして恨みず、亦た君子ならずや。」

【現代訳文】

先生がおっしゃった。「学んでは常に復習する。（だから上達が実感できる）なんと喜ばしいことだろう。
同じ道を志す友人が、遠くからひょっこり訪ねてきてくれる。なんと楽しいことだろう。（道について語り合うことができるから）
世間の人が認めてくれないからといって恨み言を言わない。こういう人をこそ、君子というのだ。」

【白文（原文）】

子曰　「學而時習之、不亦説乎。　有朋自遠方來、不亦樂乎。　人不知而不慍、不亦君子乎。」

【訓読文】

子曰、「學而時習之、不亦説乎。　有朋自遠方來、不亦樂乎。　人不知而不慍、不亦君子乎。」

【別の解釈　訓読文】

朋、遠方より来たるあり、亦た楽しからずや。

①有朋自遠方來、不亦樂乎。

【参考】憲問第十四 37

【書き下し文】

子の曰わく、「我れを知ること莫きかな。」

子貢が曰わく「何為れぞ其れ子を知ること莫からん。」

子の曰わく「天を怨みず、人を尤めず、下学して上達す。我れを知る者は其れ天か。」

【現代訳文】

先生がおっしゃった。「私を知る人がいないねえ」

子貢が言った「どうして先生ほどの方を知る者がいないでしょう。誰もが知っております」先生がおっしゃった「不運でも天を恨まず、用いられなくても人をとがめず、身近なことを学んで、しかもそれが高尚の極みにも通じていく。私を知る者は、まあ天といったところか」

【訓読文】

子曰、「莫二我ヲ知ルコト一也夫ト。」

子貢曰、「何為レ其レ莫カラレ知ルコトレ子ヲ也ト」

子曰、「不レ怨ミレ天ヲ、不レ尤メレ人ヲ、下シテ學而上ス達。

知ルレ我ヲ者ハ其レ天乎ト。」

【書き下し文】

孟武伯、孝を問う。

子の曰わく、「父母には唯だ其の病をこれ憂へしめよ。」（何晏「古注」）

【現代訳文】

孟武伯が孝について尋ねた。

先生がおっしゃった。「病気の時に心配させるのは仕方ないが、その他のことで親を心配させちゃダメだね。

【白文（原文）】

孟武伯問孝。子曰「父母唯其疾之憂。」

【訓読文】

孟武伯問孝。子曰、「父母唯其疾之憂。」

【解釈の違い】

①「**父母には唯だ其の病をこれ憂へしめよ。**」（**何晏「古注」**）

［解釈］「**両親には**せいぜい病気の事だけを心配させなさい。**病気以外のことで心配をかけてはいけない。**」

②「**父母は唯だ其の病をこれ憂ふ。**」（**朱熹「新注」**）

［解釈］「**父母は**ひたすらに子供が病気にかかることを心配するものだ。**だから自分の健康には留意する。**」

③「**父母には唯だ其の病をこれ憂へよ。**」

［解釈］「**子は**父母に対しては、ひたすらに**父母の病気のことを心配**しなさい」

兄弟序列　　伯仲叔季

（二の三）為政第二 15

【書き下し文】

子の曰わく、「学んで思わざれば則ち罔し、思うて学ばざれば則ち殆し。」

【現代訳文】

先生がおっしゃった。「先人の知識を学んでも、ただ詰め込むばかりで自分の頭で考えないなら、何も見えてはこない。逆に自分勝手に考えるばかりで、先人の知識を学ぶことをしないと、独断に陥って危険だ。」

【白文（原文）】

子曰　「学而不思則罔、思而不学則殆。」

【訓読文】

子曰、「學而不レ思則罔、思而不レ学則殆。」